

2024年度

情報化社会の教育

(第53集)

目次

I はじめに 2

II 教育実践 3

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え 3

2 第74次教育研究愛知県集会の動向 3

3 教育課程編成研究の実践報告 5

III おわりに 10

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 情報化社会の教育部会

2024年度 教育課程研究委員（◎部長 ○副部長）

ブロック推薦

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
加藤達紀	名古屋	高針台中	青木博史	海部	蟹江小	飯田孔明	みよし	三好丘小
大島創平	名古屋	大和小	○村上浩義	知教連	富木島中	山崎公洋	豊川	東部中

第71次～第73次教育研究全国集会レポート提出者

第71次			第72次			第73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
――	――	――	◎村手真樹	西春	鴨田小	○水野利明	岡崎	矢作中

第74次教育研究全国集会 レポート提出者 水野 正人（名古屋・西味鉤小）

I はじめに

Society5.0の時代を生きる子どもたちは、情報や情報技術を主体的に選択し活用していく力が必要とされ、多くの情報から必要な情報を収集・選択し、整理・分析する力や、自ら情報を発信し、他者と協働する力が求められる。

本部会はこれまで、教科の枠にとらわれず、情報活用能力を育てることを追究してきた。子どもたちは学校や家庭の中で、必要な情報を選択して収集・整理することや、自ら情報を発信し、他者と協働することなどを通して、情報活用能力を身につけている。その一方で、SNSが子どもたちにとって身近な存在となり、適切かつ安全に利用するための情報モラルを身につけていく必要がある。また、教科・領域の目標を達成するために、われわれ教員にはICTを有効に活用して授業を行う力も求められており、わかりやすく、学習効果を高める授業を行うために、ICTをどのように活用したらよいかについても考えていく必要がある。さらに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化をはかるためには、ICTをどのように活用するとよいか、必要な情報や情報機器を活用するための情報活用能力のさらなる育成やプログラミング的思考力を育むためにはどのような具体的な手だてが必要かについても追究していく必要がある。

情報社会の抱える課題は山積しているが、子どもたちは、それらに向き合い、克服していかなければならない。そのためにもわれわれ教員は、子どもの学ぶ意欲を高め、わかりやすい授業の展開を行うことを教育課程編成の基本的な考え方として、これからも追究していく。

めざす子ども像 ～ 情報活用能力育成のために ～

		情報活用の実践力	情報の科学的な理解	情報社会に参画する態度
小学校	低学年	情報メディアを活用し、自分で感じたことを発表する。	情報メディアにふれ、体験活動を通じてその活用方法を知る。	情報を発信する際のマナーやルールを身につける。
	中学年	情報メディアを活用し、自分の調べたいことについて情報を収集・整理して、発信する。	さまざまな情報メディアの活用方法を、体験活動を通じて身につける。	情報メディアを活用して人とふれあい、情報の受け手を意識する態度を身につける。
	高学年	課題や目的に応じて必要な情報を収集・整理し、受け手にわかりやすく情報を発信する。	さまざまな情報メディアの特性について理解し、適切に活用する。	情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、情報を批判的に読み解く力を身につける。
中学校		情報メディアの特性を理解したうえで、目的に応じた活用方法を選択して自らの課題を解決する。	情報の分析や選択・整理を行い、自らの情報活用を評価・改善する。	情報発信に伴う責任について理解し、社会の一員として情報社会に参画する態度を身につける。

また、情報活用の実践力については、次のように考えている。

	段 階	内 容
の 情 報 実 践 力 活 用	情報の収集	情報メディアを活用し、問題解決のために必要な情報を収集する。
	情報の選択	収集した情報の真偽や価値を判断し、必要な情報を選択する。
	情報の整理・分析	選択した情報に、新たな情報や自分の意見などを加え、整理・分析する。
	情報の発信	整理した情報を、受け手を意識してわかりやすく発信する。

Ⅱ 教育実践

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」について

情報社会に生きる子どもたちは、無数にある情報から必要な情報を選択し整理する能力や、自ら情報を発信し他とのコミュニケーションを深める能力が求められている。

そこで本部会では、以下の4点を基礎・基本と考え、追究したい。

- ・ I C Tの基本的な操作を行う力
- ・ 目的に応じてさまざまな情報を適切に収集、選択、整理・分析、発信する力
- ・ 情報モラルの必要性や情報に対する責任について考える力
- ・ プログラミング的思考に基づき、物事を順序立てて考え、問題を解決する力

○「生きる力」をのばすための重点

身近にあるメディアから情報は途切れることなく流れてくる。その情報に惑わされてしまう子どもたちも多い。情報活用能力を確かなものにするために、情報や情報技術を受け身で捉えるのではなく、主体的に選択し活用していく力を伸ばすことが必要である。

また、著作権や個人情報保護、情報の適切で安全な取り扱い方や情報モラルなどを身につけることで、情報社会において、豊かなコミュニケーション能力をのばしたい。

2 第74次教育研究愛知県集会の動向

(1) リポート報告の概要

- ① 海部のA小分会からは、授業の中で、I C Tやアナログ手法をバランスよく活用する授業実践が報告された。I C Tを効果的に利用した直接対話の場面づくりを基盤とし、ロイロノートの入力を手書きで行うなど、幅広い学年に対応した実践の中で、話し合い活動のよさを感じる子どもが増えた一方で、タイピングのスキルが低いことやアナログ手法とのバランスを意識した授業づくりに取り組む必要があると報告された。
- ② 一宮のB小分会からは、協働的に学ぶことに適した意見交換ツールを使った授業の実践が報告された。ノートやホワイトボードを使用するよりも、付箋の移動、分類、整理が簡単で、話題に沿った意見交換ができることが分かった。授業動画を子どもたちの意見交換ツールに配信することで、教科書やノートでまとめるよりも自分の考えをさらに深めることができるようになった。デジタルとアナログのよいところを活用すると、子どもたちが自身の考えに対する自信が増したことが分かった。
- ③ 刈谷のC小分会からは、思考ツールや話型を活用して、他者とのかかわりを深め、自分の住む町について気づきを深める実践が報告された。2年生が1年生に対して自分の住む町の「すごい」を伝えるという目的意識をもち、タブレット端末を活用して町探検を行い、その結果をまとめる活動を行った。また、クラゲチャートを利用したり、タブレット端末で作成した発表用資料をわかりやすく伝えるための話型などの思考ツールを活用したりすることで、自分の考えを整理し、相手に伝えることができるようになった。また、I C Tを使用することで、グループや全体での話し合いが活発になり、気づきや理解を深めることができた。
- ④ 豊橋のD小分会からは、問題解決にむけてI C Tの活用手段を選択することで、地域と主体的にかかわり、問題解決のために自ら行動しようとする児童の育成についての実践が報告された。「問いを生む場」においてForms アンケートを活用、「表現方法を追究する場」において動画作成、「外部との交流の場」においてTeamsを活用するなど、児童の願いに応じてI C Tの使い方を選択したことで、話し合いや改善作業に積極的にかかわりながら地域の魅力を発信することができた。
- ⑤ 岡崎のE小分会からは、プログラミングロボットRootの操作活動を通して、数学的な

見方・考え方を働かせながら主体的・協働的に学びを深められる児童の育成についての実践が報告された。目の前で動くロボットを使うことで、トライアンドエラーを繰り返しながら課題解決にむけて主体的・協働的に学びを深め合うことができた。スクールタクトや電子黒板を活用した「見通しタイム」を設定したことで多様な考えに触れることができ、算数が苦手な児童でも取り組むことができた。

- ⑥ 西春のF小分会からは、インターネット接続端末と正しくかかわるにはどうしたらよいか子どもたちとともに考える実践が報告された。朝学習の時間を効率的に使って、クイズ形式で個人情報や情報モラルの知識を増やしたり、NHK for school の教材を活用し、SNS上でのコミュニケーションを考えたり、トラブル事例を話し合ったりすることで、子どもたちが主体的に具体的なマイルールをつくることができた。
- ⑦ 岡崎のG中分会からは、特別活動の授業などを通して、メディアの利用にかかわる問題点についての理解を深め、子どもたち自身が自分のメディア利用について振り返り、自己管理をしようとする態度の育成に関する実践が報告された。特別活動の授業では、メディア依存に関する動画をもとに話し合いをし、自分の生活を振り返ることで、メディアの適切な利用について考えを深めることができた。
- ⑧ 名古屋のH小分会からは、自分に合った方法で情報を活用して、すすんで学びに向かおうとする子どもを育成する実践が報告された。自分に合った方法を見付けるために、「プわふレ」シートを活用することで、子どもたちは学習のねらいを自身でよく考え、自分にとって必要な情報や学びを選択することができるようになった。また、知識構成型ジグソー法を取り入れたことで、一人ひとりの役割が明確になり、すすんで学び合おうとする姿が以前よりも見られるようになった。
- ⑨ 稲沢のI小分会からは、ICTを活用した複線型授業についての実践が発表された。ICTを意欲的に使用することができる子どもについて、表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを使用して、複線型授業の実践が紹介された。一斉授業ではなく、子どもたちがそれぞれ目標を設定し、教員はファシリテーターとしてそれぞれの子どもを支援することで、子どもたちが意欲的に取り組むことができていた。
- ⑩ 名古屋のJ小分会からは、体験学習の充実や、QNK S思考法を用いた探究活動の実践が報告された。浄水場の見学や飲料メーカーによる出前授業など、6つの体験学習を行うことでさまざまな立場の人から、多面的に情報収集をすることができた。また、Q（問いを立てる）、N（情報を抜き出す）、K（情報を組み立てる）、S（整理・説明）のサイクルを繰り返し行うことができるシートを活用し、子どもたち自身が次の問いを生み出し続けることで、問いが深化し夢中で探求することができた。

(2) 質疑・応答の概要と助言者によるご指導・ご助言

討論では、子どもたちの意見交換方法について話題があがった。タブレット端末における思考ツールは各市町村で異なるため、よりよい活用法について、具体的なソフト名を挙げながらそれぞれの良さや改善点について話し合いが行われた。

助言者からは、情報教育の大切さや、今後確実に複雑化（シンギュラリティ・VUCAなど）していくことが予想される未来におけるICT教育のあり方についてご助言いただけた。小中学校では情報科は教科化されてはいないが、教育の基盤となるほど大切なものであり、一つの情報に接したときに、「なぜ?」「どうして?」という意識を大切にするとよいこと、情報は作り手の意図が存在するということを伝えることが大切だと教えていただいた。

3 教育課程編成研究の実践報告

＜特別支援学級（小学校低学年）対象＞考えの幅を広げることができる生徒の育成
～おすすめシート、お気に入りシートをロイロノートで活用して～

実践例におけるポイント

- (1) 自分の考えを理由とともにもつ活動（おすすめシートの活用）
- (2) 自分の中に新しい考えとその理由を加える活動（お気に入りシートの活用）

(1) 研究のねらい

私は、特別支援学級の生徒が、将来社会生活や職業生活を送る上で、仲間どうしで話し合っ
て物事を決めることができるようになってほしい。そのためには、自分の考えだけでなく、
仲間の考えのよさを見つけて、自分の考えの幅を広げていくことが大切である。本研究にお
ける「考えの幅を広げる」とは、一人ひとりに応じたICTを活用して、仲間の考えを聞いた
生徒が、自分の考えと異なる考えであっても、その理由に着目することでよさを見つけ、
仲間の考えや理由を参考にしたり取り入れたりすることで、自分の中に今までなかった新し
い考えとその理由を加えることである。

昨年度、本校の特別支援学級で、学級で行うレクリエーション（以下学級レク）を話し合
いで一つに決める活動をした。その活動では、各自が行いたい学級レクを伝えることはでき
たが、その理由を伝えることができておらず、案を一つに絞ることに苦労していた。また、
生徒の中には考えを理由とともに伝えることができた生徒もいたが、仲間と口頭で考えと理
由を伝え合うだけで終わってしまい、その中からよさを見つけて自分の中に取り入れる生徒
はほとんど見られなかった。このことから、まずは生徒たちが自分の考えを理由とともに伝
えることができ、次に、仲間の考えとその理由に着目しやすくすることで、仲間の考えのよ
さに気づき、自分の中に新しい考えとその理由を加えることができるようにすることが必要
であると考えた。そのために、ICTを活用し、情報を生徒に合った表現方法（画像・音声・
動画・テキスト等）で視覚化することで、自分の考えと理由をもちやすくする。さらに生徒
が理解できるペースや方法で仲間の考えと理由を理解し、自分の中に新しい考えとその理由
を加えることができるようにしていきたい。

本研究では、考えの幅を広げることができるようにするために、ICTを活用した二つの
活動を実施する。一つ目は「おすすめシート」を活用した「自分の考えを理由とともにもつ」
活動、二つ目は「お気に入りシート」を活用した「自分の中に新しい考えとその理由を加え
る」活動である。本研究で検証する仮説は以下とする。

ICTを活用して、「自分の考えを理由とともにもつ」活動と「自分の中に新しい考えとその
理由を加える」活動を行うことは、考えの幅を広げることができる生徒の育成に有効である。

(2) 研究の方法

① 研究の具体的な手だて

探究学習・協働学習システムとして「ロイロノート・スクール」を用いる。手だてで使
用するシートをロイロノート・スクール上で作成することで、情報の収集と整理をしやす
くし、文字で考えや理由を表現することが苦手な生徒も、画像・音声・動画などの生徒に
合った表現方法でまとめることができる。

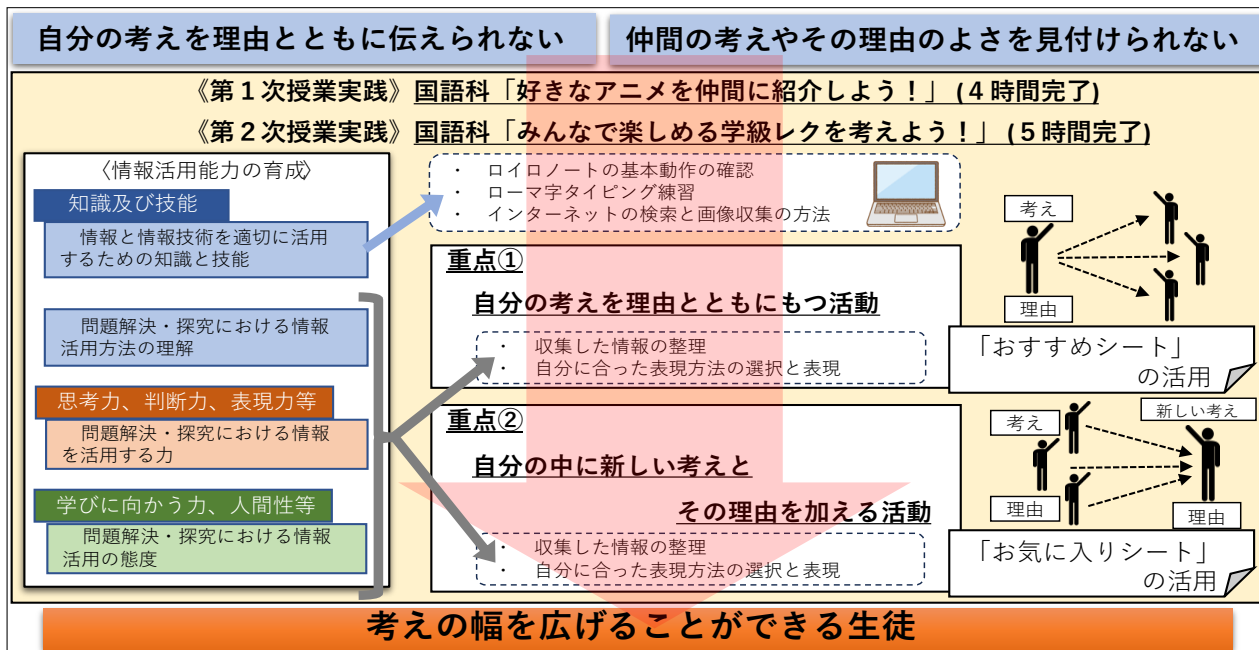
ア 自分の考えを理由とともに活動

まず、「おすすめシート」の課題を確認し、仲間におすすめするものを決める。次に、おすすめするものに対して、事前にロイロノート上で画像・名前、思うこと・気持ちを自由に調べたり考えたりして情報の収集と整理をする。ロイロノート上で、視覚化された情報の中から、理由を作成する上で必要な情報を選択させることで、おすすめする理由を考えることができるようにする。また、「もっと理由について教えて！」の欄に、その生徒に合った表現方法で表現させることで、その理由を具体的に、または、複数の視点から説明をして、おすすめすることができるようになると考える。

イ 自分の中に新しい考えとその理由を加える活動

「お気に入りシート」を活用して、自分の中に新しい考えとその理由を加えることができるようにする。まず、作成した「おすすめシート」を仲間と交換する。「いいな」と思った仲間のおすすめの考えを選び、自分の「お気に入りシート」上に選んだ理由とともに入力する。この活動を行うことで、自分の中に新しい考えとその理由を加えることができるようになると考える。

② 研究の流れ



③ 対象生徒

名古屋市立高針台中学校特別支援学級に在籍する6人(3人を観察生徒A・B・Cとする)

(3) ポイントをふまえた実践

① 教科・単元 国語科「みんなで楽しめる学級レクを考えよう！」

② 目標

自分が考えた学級レクを紹介する中で、自分の考えを理由とともにもつことができるようにする。また、仲間が紹介した学級レクとその理由に着目し、自分の中に新しい考えとその理由を加えることができるようにする。

③ 生徒の活動の様子と評価

ア 自分の考えを理由とともにもつ活動

㊦ 活動の様子

生徒が考えた学級レクは「お化け屋敷」「歌合戦」「卓球」「バスケットボール」であった。この単元では、みんなで学級レクを楽しむためのポイントを考えてまとめ、それを「楽P」と呼ぶようにし、おすすめする理由を考える際の手掛かりとして提示した。これにより、生徒は事前に調べたことをもとに「おすすめシート」に理由をまとめる際に、楽Pも見ながら、みんなで楽しめる学級レクはどんなレクかを意識して、理由を整理して考えることができた。

☆ 楽P（たのびー）☆

- ① みんなで一緒にできる
- ② 協力できる
- ③ 嫌なことがない
- ④ ルールややり方が分かる

【楽Pについて】

① 活動の評価基準と評価

	評価基準	生徒
◎	自分の考えを理由とともにもち、その理由を複数の視点から説明できる。	A
○	自分の考えを理由とともにもつことができる。	B C
△	自分の考えを理由とともにもつことができない。	

㊦ 抽出生徒の評価

生徒A	評価：◎
	おすすめする学級レクを「お化け屋敷」とし、その理由を「お化けが出て来てかくれるのが楽しい」と入力した。「もっと理由について教えて！」の欄には、「みんなで道を選ぶ（ことが）おもしろい」「走ると隠れる（ことが）怖い気持ち（で）楽しい」「脱出（すると）プレゼントをもらえる（ようにすると楽しい）」などと理由を複数の視点から説明することができた。事前に調べてまとめた理由を引用し、「おすすめシート」をまとめることができた。 【生徒Aの「おすすめシート」】
生徒B	評価：○
	おすすめする学級レクを「歌合戦」とし、その理由を「みんながすきなきよくをみんなで歌えるから」と入力した。「もっと理由について教えて！」の欄には、「みんながいっしょにうたえる」と入力したり、「僕は〇〇〇の曲が好きです。みんなが歌えるからです」と動画で伝えたりしており、みんなが一緒に歌うことができることを理由として一つ挙げることができた。
生徒C	評価：○
	おすすめする学級レクを「卓球」とし、その理由を「ラリー（を）みんな（で）できる」と入力した。もっと理由について教えて！」の欄には、カエルや鳥のキャラクターとラリーをしているイラストを載せたり、「みんなで一緒にできるからです」と動画で伝えたりしており、卓球はみんなで一緒にできる（ラリーをすることができる）ことを理由として一つ挙げることができた。

イ 自分の中に新しい考えとその理由を加える活動

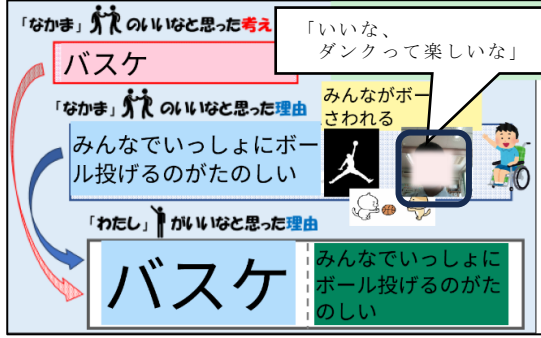
㊦ 活動の様子

生徒は、横並びになった仲間の「おすすめシート」と自分の「お気に入りシート」を見て、どの理由を自分のシートに取り入れようか考える姿が見られた。仲間の理由の文字や画像を見るだけでなく、添付された音声や動画を見返しながら、慎重に仲間の理由を選んでいった。選んだ仲間の考えとその理由から、自分の中に新しくいいなと思える学級レクとその理由をもつことができた。

㊧ 活動の評価基準と評価

	評価基準	生徒
◎	仲間の考えとその理由に着目し、自分の中に新しい考えとその理由をもち、その理由を複数の視点から説明できる。	
○	仲間の考えとその理由に着目し、自分の中に新しい考えとその理由をもつことができる。	A B C
△	仲間の考えとその理由に着目し、自分の中に新しい考えとその理由をもつことができない。	

㊨ 抽出生徒の評価

生徒 A	評価：○ いいなと思った学級レクを「バスケット」とした。「お気に入りシート」の「なかまのいいなと思った理由」の欄には、ダンクをイメージするイラストを引用しており、その隣に添付してある仲間の写真には「いいな、ダンクって楽しいな」と、点を取ることの楽しさについての音声を吹き込んでいた（本来は、わたしがいいなと思った理由欄に表現すべき内容）。授業の振り返りでは、「バスケットがいいなと思う理由は何ですか」という質問に対して、「どりゃーと、網にボールが入ったら勝ち」とダンクで点を決める場面のよさを伝えていた。「わたしがいいなと思った理由」の欄には、「みんなでいっしょにボールを投げるのがたのしい」と入力したが、それは仲間の「おすすめシート」のテキストをそのままコピーして添付しただけのものであり、本人の理由ではないと判断する。よって、ダンクに言及したことのみ理由をもつことができたと判断する。
	 【生徒 A の「お気に入りシート」】
生徒 B	評価：○ いいなと思った学級レクを「卓球」とした。「お気に入りシート」の「なかまのいいなと思った理由」の欄には、仲間の「おすすめシート」から「ラリー（を）みんな（で）できる」というテキストやカエルがラリーをしているイラスト、また、卓球がみんなのできる旨を伝える動画を引用していた。「わたしがいいなと思った理由」の欄には、「卓球のラリーがいいなと思いました。」という旨を伝える動画と、「お気に入りシート」自体に「みんなで一緒にできるといいな」という音声を吹き込んでいた。よって、生徒 B は「ラリーをみんなで一緒にできるといいな」という理由を一つもつことができたと判断をする。
	評価：○ いいなと思った学級レクを「歌合戦」とした。「お気に入りシート」の「なかまのいいなと思った理由」の欄には、仲間の「おすすめシート」から「みんなが好きな曲をみんなで歌えるから」というテキストを引用していた。「わたしがいいなと思った理由」の欄には、「わたしは、歌合戦のみんなが好きな曲をみんなで歌えるから（良）いとおもいました」とテキストに書き、歌合戦で楽しそうに歌っているイラストを三枚集めていた。よって、生徒 C は「歌合戦はみんなで好きな曲を歌えることがいい」という理由を一つもつことができた

(4) 研究のまとめ

① 研究から明らかになったこと

自分の考えを理由とともにもつ活動では、ICTを活用して、なぜその考えをもったのかを説明できるようになった。当初、生徒たちは、理由を文字で書いて説明したり、口頭で伝えたりをすることに苦手意識があった。しかし、授業実践を行う中で、ICTを活用し、自分に合った表現方法で理由を説明する姿が見られるようになった。自分の中に新しい考えとその理由を加える活動では、視覚化された仲間の考えとその理由が自分の手元にあることで、いつでも自分のペースで確認することができ、仲間の理由に着目しやすくなったと考える。二つの活動の評価は、すべての生徒が○以上の評価になった。二つの評価の向上は、改善した手だてが有効であったとともに、生徒の情報活用能力の向上も背景にあったと考える。表現したい方法を選択するだけでなく、ICTも自分自身で使って表現できるようになったことで、理由を表現しようとする姿勢もより積極的に変化していったと考える。

観察生徒	(1) 自分の考えを理由とともにもつ活動の評価			(2) 自分の中に新しい考えとその理由を加える活動の評価		
	実態把握	第1次授業実践	第2次授業実践	実態把握	第1次授業実践	第2次授業実践
生徒A	△	△	◎	△	△	○
生徒B	○	○	○	△	△	○
生徒C	△	○	○	△	○	○

② 実践後の生徒の変容

本実践後、教員の司会の下、生徒どうしで物事を決定する活動として、みんなで楽しめる学級レクを二つ決める話し合い活動を行った。すると、昨年度とは異なる生徒の様子が見られた。話し合いの最初に、自分がいいなと思う学級レクを一人ずつ答えさせたところ、すべての生徒がすすんで自分の考えとその理由についても自信をもって答えることができた。また、生徒Aについては、当初に自分がいいなと思っていた「お化け屋敷」ではなく、仲間がおすすめした「バスケットボール」と答え、仲間の考えを自分の中に取り入れて、自分の中の新しい考えとして理由とともに発表することができた。話し合いの途中で、生徒Bが「お化け屋敷は暗くて怖いから嫌」とつぶやいた。それを聞いた生徒たちは、「お化け屋敷は消します」「(できなくても)大丈夫、平気」とそれぞれが声を出して、生徒Bが楽しむことができない理由を尊重していた。そして、お化け屋敷は候補から外れた。話し合いの終盤では、学級レクの一つがバスケットボールに決まり、残すは一つとなった。みんなが「歌合戦」を推す中で、生徒の一人が「卓球」を推し続けていた。すると、生徒Cは「(歌と一緒に)ダンスをするのはどう」と伝え、みんなが歌合戦で楽しむことができるよう提案をしはじめた。生徒Bは「(みんなが好きな)オー・シャンゼリゼを歌ったらいいいよね」と続けて提案をした。意地を張って学級レクを卓球にしようとしていたその生徒も、最終的に、仲間の思いに心が傾き、笑顔で大きなOKサインを出していた。

これまで、自分の考えだけを主張することの多かった生徒たちが、仲間にそのレクのよさを伝えるための理由を伝えたり、仲間の考えとその理由に着目して、自分の中に新しい考えとその理由を加えたりして、考えの幅を広げて仲間どうしで話し合って物事を決めていこうとする姿勢が見られた。

③ 今後の研究にむけて

本研究では、ICTを活用して、生徒たちの考えの幅を広げることができたと考える。しかし、これは、生徒が仲間どうしで話し合って物事を決めていくための第一歩である。引き続き、一人ひとりの特性に応じてICTを活用させ、情報活用能力を育てながら、生徒が仲間どうしで話し合って物事を決めるために必要な力を育成する支援を追究していきたい。

Ⅲ おわりに

令和3年4月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築をめざして」では、ICTを活用することで、知識及び技能の習得のみならず、児童生徒の思考、判断、表現や、学習状況の他の児童生徒との共有、学びの振り返りを行う際の有効な手段にもなり得ることが示された。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実し「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけた授業改善につなげていくことが明示された。

現在、政府によるGIGAスクール構想により、一人一台タブレット端末の利活用がすすむにつれてさまざまな課題が出てきている。例えば、端末の劣化によるハード面の課題や自治体・学校によって一人一台端末の利活用状況に差が出ている問題などが挙げられる。教える側の端末活用における課題としては、「先生のICTスキル不足」「研修体制の不足」「ICT支援員の不足」なども挙げられる。しかしながらこれらの課題を解決するどころか、政府が提唱するいわゆるNEXTGIGAスクール構想では、一人一台端末のさらなる利活用を促進することが求められている。

このように子どもたちを取りまく学習環境が急速に変化していくなか、社会のテクノロジーも目まぐるしく発展し、予想もできない未来でも活躍していく子どもたちを育ていく立場にある私たちは、新しい時代に対応できる力を身につけさせなければならない。

本部会では、情報社会の中での子どもたちの実態を背景に、「今、子どもたちに必要な力とは何か」を明らかにしてきた。その上で教員がICTを活用したわかりやすい授業の工夫や情報活用能力を育成するための学習活動、そうした活動の中での情報モラルの指導法や、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化をはかるためにICTをどのように活用するとよいか、プログラミング的思考力を育むためにはどのような具体的な手だてが必要かについても研究をすすめてきた。

また、ICTを活用することで情報活用能力のような、従来はなかなか伸ばせなかった資質・能力の育成や、知識の習得に関して、特性等により今までの学習方法では困難さが見られた児童生徒への効果の発揮、他の学校・地域や海外との交流など、今までできなかった学習活動の実施、家庭など、学校外での学びの充実などにおいても、ICTの活用は有効である。

情報モラルの育成については、発達段階に応じた情報モラル教育の実践を通して、子どもたちのデジタルシティズンシップを育成することをめざしている。ICTやSNS等を使わせない指導ではなく、それらを日常的に活用することを前提とした上で、誰かに決められたルールに従うだけではなく、自らが情報機器や膨大な情報と向き合っていくための方法を選択して、実践していく力を育むような指導をしていく必要がある。

プログラミング教育では、従来のプログラミング教材を使ってゲーム感覚で学ぶ実践に加え、フィジカルプログラミングを通して、子どもたちがコンピュータの働きが社会をよりよくすることを実感でき、コンピュータの働きを通して社会貢献する態度を育むようなプログラミング教育が積極的にすすめられるようになってきた。また、ICTを活用し、一人ひとりの学習進度や興味に合わせた探究的な学習の場を設定し、活動での気づきを他者と共有することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化に重点を置く実践も多く見られるようになってきた。

本年度の成果としてICTは、子どもたち一人ひとりの学習進度、意見や考え、興味・関心や願いを視覚化・共有化することができ、主体的・対話的な学びにつなげることができた。本年度の成果を受け、今後もさらなるICTの効果的な活用方法を研究していく必要があると考える。今後、情報化社会の教育部会における、教育課程研究の成果が、各職場でいかされ、愛知の教育活動がさらに発展していくことを願ってやまない。